

## 研修会報告:「日米同盟の未来」

講演:ルーベン・E・ブリゲッティ氏(ジョージ・ワシントン大学エリオットスクール学長)

研修担当理事:佐藤充孝



12月18日(月)、経団連米国事務所において、ルーベン・E・ブリゲッティ氏をお招きし、41名の出席者にご参加頂き、ラウンドテーブル形式の講演会「日米同盟の未来」を開催しました。

講師のブリゲッティ氏は、国務省次官補代理(アフリカ担当及び人口・難民・移民担当)、アフリカ連合代表部大使を歴任され、現在、ジョージ・ワシントン大学エリオットスクール学長を務めておられます。

ジョージ・ワシントン大学エリオットスクールは、ワシントン DC フォギーボトムに位置し、国際関係分野において世界のトップ校の一つと評価され、特にアジア研究においては有力な研

究所を有し、エリオットスクール卒業生の約4割が国務省勤務など外交に携わっています。近年、中国人学生が急増して800名程度までに達しているとのこと。こうして米中の人的ネットワークの基盤が蓄積する一方で、日本人の在籍学生は僅か5名に留まっており、将来の日本にとっても看過できない状況となっています。



本研修会において、ブリゲッティ氏は、幼少期から海軍兵学校において受けた教育、そして初訪日で広島を訪れた際に受けた衝撃といった自身の経験を踏まえ、かつて戦争で戦った両国が築き上げた現在の日米同盟は、「20世紀から現代における最も偉大な歴史物語」と称えました。そして、日米同盟をより強固なものとするためには、政府、議会との関係強化だけでなく、中国がしているような「将来への種まき」、即ち若者同士の関係作りが重要だ、と指摘されました。こ

の観点から日本人留学生数を増やしていく必要性を強調すると共に、日本のビジネス界には経済的投資だけでなく、社会的投資にも注目するようにとのコメントがありました。そして、政策リーダーとの交流推進や奨学金制度の立ち上げなどの社会貢献活動への投資は、「Social Return」として返ってくるものだということを忘れないようお願いしたい、といった提言がなされました。

その後のラウンドテーブルにおける質疑応答では、歴史を客観視する重要性や移民によってもたらされた出自にとらわれない米国民としての意識、米国の懐の深さといった価値観



が披瀝されました。また、国際関係学を学ぶことで、企業教育では得られないことが出来ない政治分析・歴史的素養・語学といった外国環境に合わせて適合させる能力が得られるため、6割にのぼる多くの卒業生が米国の大手民間企業に就職する、といったお話もありました。参加者からは「ハイレベルな考察」「ジョージ・ワシントン大学に行きたくなった」といった感想を頂きました。

今回の研修に際し、会場をご提供頂いた経団連米国事務所様に、この場を借りて御礼申し上げます。